

中島 恵

オディロン・ルドン作 《夢のなかで》 についての一考察

—顔の形象にみる両義性

中島氏の研究は、オディロン・ルドンの出世作ともいえる石版画集《夢のなかで》（1879年刊行）に関して新しい解釈を試みるものである。この作品群には、すでにさまざまなイメージの源泉の研究の蓄積があり、それらは視覚的、文学的、伝説、進化論、観相学等々、広い範囲にわたっているものの、断片的指摘にとどまり、全葉を通じての一貫した解釈には至っていない。

中島氏は、論証の方法を図像学的に行うとしたうえで、まず当時の人類学、進化論などの書物の挿絵や写真を参照して、1～4葉に見られる顔のイメージに「原始人」「未開人」との深い関連を見出した。そこでは西洋文明と比較して「野蛮」で「劣った」人間の顔が採用されている。さらに氏は、6～10葉における顔のイメージに精神医学との関連を見出し、ルドンが各種の精神病患者の表象を利用したことを指摘した。そして氏は、ルドンがこのような「文明」と「正常」を逸脱した周縁の人々の顔の特徴を作品に取り入れたのはなぜか、そしてそれにもかかわらずこの版画が美的な「聖性」「神性」を持っているのはなぜか、という問題を解き明かそうとする。

中島氏は、ルドン自身が幼少時に癲癇を患い、後年には文明の外にいたクレオール娘を妻にしたことから、そのような存在に特別な感情を抱いていたこと、さらに当時大きな影響力をもっていた精神科医シャルコーの書物のヒステリー患者の写真をルドンが宗教的な恍惚を思わせる聖なる表現に利用し、その意味を重層化させたことを論証した。

中島氏の手法は、ルドンの作品と類似する挿絵や写真を探しあて、彼がそれを参照した可能性を挙げ、また彼のこの分野への関心をも指摘して高い蓋然性を示したものである。その点で論証は説得的であり、また当時の社会における知的関心や流行とも合致する。

人類学、民族学への関心が高まって万国博覧会で世界各地の「原住民」が展示され、人間の意識や精神のあり方への関心から夢や精神病の研究が進んだ19世紀の後半に、これらの関連書物が多く挿絵を伴って刊行されたことはよく知られており、ルドンがそれらを利用して自らのイメージを作りあげたことも納得がゆく。またそのような存在をどのようにとらえるか、という視点も当時の知的な人間にとって重要な課題であったに違いない。このように、ルドンの視点は深く時代の問題とも関わりをもっていることが浮き彫りにされる。

全体として、人類学的、医学的領域の表象を用いてルドンの芸術をとらえ直し、「非理性」に「神聖」を付与するというルドンの美学の両義性を明らかにしたことは、独創的であり高く評価できる。

一方、類似性の論証において、幾つかの比較はさほど説得的でないという意見や、顔が主なるモチーフでない場合の画面全体の意味はどうなるのかという疑問、ルドンが参照したと思われる文献とのより具体的な接点の証明を望む評もあった。

しかしこのような指摘を考慮に入れても、中島氏の研究は多くの先行研究を渉猟し、精緻に組み立てられ、論理的に整合性があり、また独創的な視点から新しい地平を切り開いたという点において、優れた研究であるとみなされる。

以上の理由から、中島恵氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。